ある男の転生物語　（ネタ）

夢追い人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ある男の転生物語　（ネタ）

【Ｎコード】
Ｎ３２４７Ｙ

【作者名】
夢追い人

【あらすじ】
思いついたネタを載せていきたいと思っています。
色々な世界で転生します。

てきにのろわれてしまった！（前書き）

前から書いてみたかった作品のネタを思いついたので、書いてみました。
プロローグみたいなものと思ってください。

てきにのろわれてしまった！

物語は、ある日夜知春亮という少年が父親から、一方一メートルの黒い立方体を受け取ったことから始まった

いつもの父親の病気だと考え、彼は疲れた様子の宅配業者から荷物を受け取った

この時点で、自分の父親をある意味信じている彼は、その荷物が決して普通ではないと判断している。宅配業者が帰ると、彼は継ぎ目を指でなぞったり、中に指を入れて弄りながら、どこからともなく聞こえてくる声を幻聴だと決めて検分していた

そんな時に、僕はハルにいつものちょっとした頼みごとをしようと訪れた

「ハル～、ちょっといいかな？　今日もあそこで・・・」

「うん？　守人また来たのか。　いいかげんちゃんと「ああ、お邪魔しちゃったね。」・・・は？」

「ごめんね？　お邪魔ものはさっさと退散するよ。また今度頼みに来るから～」

そう言って僕は足早に去って行った

そう、僕は見なかった

ハルが女の子を真昼間から襲っているなんて見たくはなかった

いや、嘘です。カメラがあればよかったのに！　きっとこのちゃんがおもしろい反応をしてくれる！　なんて惜しいことをしてしまったんだ！

僕は自分の間の悪さやカメラを常備していなかったことを悔やみつつ、与えられた自室に帰って寝た

そして、夜のことである。疲れて寝てしまっていたハルがその重さに耐えながら運びいれた張本人が、暗い家の中を彷徨っていた。台所に辿りついたその誰かは食べ物は無いかと探し、それを見つけて食べるのに夢中となっていた

寝ていたハルは目をさまし、食事の用意をしようとしたのだおうが、その音に気付いた。カリカリパリパリというわけのわからない音に心当たりのモノに当てはめているが、一人については部屋の光がついていたので除外し、あいつ（僕）はそんな奴じゃないと考えてまた候補から外れる

となると、泥棒か！　と考えたハルは慎重に行動し、息を殺して台所の中を観察する。泥棒ならすぐさま１１０番に連絡しようと考えていた彼の視線の先にいたのは・・・

白銀の全裸煎餅泥棒少女でした

ハルと少女は驚愕してお互い顔を見合わせ、今度は少女が叫びました

「ほわ・・・さ、先程のハレンチ男！」

煎餅泥棒の少女は自分の恰好に気づくと手当たり次第にハル（彼女から見て、ハレンチ男）に素晴らしいコントロールで投げつけ、何とか手元に残した二枚の煎餅で体を隠なり、彼女は寄るな！　と言うと、ハルに決定的な一言を叫びました

「・・・・・・の、呪うぞっ！」

ハルはその時になって、やっと理解しました

あの箱は彼女であり、呪われている道具であるということを

僕が昼寝（昼のことからの現実逃避）から起きたら夜になっていたため、ハルに何か食べ物がないかと聞きに行くと、「豆腐」だの「煎餅」といった言葉が聞こえてきたばかりか、「服を貸して・・・」「指を入れて弄り回し・・・」と聞こえてきた僕はとうとうハルが知らない間に大人になったと勘違いし、いつもの食事をとっている部屋に突貫した

「ハル―！　とうとう大人の階段登っちゃったの！？　今日は赤飯だね！」

バシーン！と襖を開け放った僕が見たのは、秋刀魚を箸で解していたハルと、距離を取ってハルを警戒していた見たことのない白銀の髪の彼女だった・・・

あれは何だ！？　彼女とはどういった関係だ（笑）！？　大人しく飯食えー！！　だのちょっとした騒ぎはおきたものの、何とか落ち着き、僕を警戒する彼女に話を聞く

とりあえずハルが話を切り出そうとするが、僕がボケる

「そういやお前、名前は？」

「え？　ハル、知らない女の子と・・・」

「いや、だから違うからな？　で、名前は？」

「ふぃあ・・・」

彼女はそのことについて話す気はなかったようで、眉を寄せ、口を閉ざす

「フィア、か？」
「（フィア、ね？）」

ハルは聞き返すが、彼女――フィア（仮）は自分のことはどうでもいいと言って、警戒していた対象である僕の方を向いた

「赤いの、お前は何だ？」
「僕は盾為（たてなし）守人（もりと）。ここ、夜知家でお世話になっているんだ。よろしくね？　察しているように君と同じく呪われたモノで、盾だよ。世の中、何があるかわからないよね～」

まさか無機物になるとは・・・
誰にも聞こえない程度の声でボソッとつぶやいていると、彼女はとりあえず納得したのか警戒が弱まった
そこで、ハルは本題を切り出した

「結局、お前って何？　どういう箱なんだ？」

「う・・・」
「「う？」」

フィアに聞き返す。すると、何の前触れもなく眉を吊り上げ、怒り出した。怒りの煽りをくらった秋刀魚がフォークでメッタ刺しにされる

「うるさい！　お、お前たちに関係ないわ！　あほー！」
「（ああ、秋刀魚が！）」
「うわ、何だ？　そんなストレートな罵り方久しぶりに聞いたぞ！？　子供か！」
「な、なにおう！」

秋刀魚を口から吹き出しながら彼女は言い放った
ハルが注意して口を閉じるように言うが、彼女は聞き入れず、
「まったく・・・女の過去を根掘り葉掘り聞くとは。　ハレンチ小僧め！」
と断定された
話が進まないため、何とか耐えたハル（ハレンチ小僧）は、大人になれ～、と自分に言い聞かせながら折れることにしたようだ
「ふぅ・・・ま、お前らの過去が基本的にあんまり楽しくないことだってのは俺も知ってるからな。怒らせてまで聞くつもりはないよ」
こいつはそうじゃないみたいだがな・・・
隣にいる赤髪の子供（僕）を見るが、僕は呑気にご飯を食べてた
フィアはハルの言葉に毒気を抜かれたようで、ゆっくりと怒りを消して下を向く
「あの姿は、嫌いだ。できれば・・・あまりなりたくはない。」
その言葉に僕は「ああ、この子もそうだったんだな」と思った
むしろ僕の場合がおかしいのだろう。いや、あきらかにおかしい
あれ（転生？　むしろ憑依？）とか、それ（自分はこの世界以外にもいる）とか・・・
そんなあれこれ考え始めた僕を置いて話は進む
「崩夏（ほなつ）とか言ったな。お前は奴の息子か？」
「そうだよ。春亮だ。親父、今どうしてた？」
「知らん。まだ向こうでやることがあるとか言っていた」
「相変わらず自由人すぎるぞ、馬鹿親父め・・・」

「本当に凄まじいね。何の仕事してるんだろね？」
「さあな。生活費の振込を忘れん限りは放置プレイって感じだ」
その言葉に僕は苦笑いする。家族で実の父親である崩夏さんをある意味信用しているのは分かるが、少しは心配してあげてもいいのにそんな僕たちを見たフィアが、

「お前といい奴といい、その、妙だな。普通の人間は、私やそいつのようなモノを理解などしないと思っていた。」
「この家は昔からお前らみたいなん受け入れてやってきたって話でな。まぁ基本は大したことないチョイ呪われの道具なんだが、たまにお前みたいにぶっ飛んだ奴も来る」

こいつもな、と僕を指す。一度静かになるが、フィアが何かを決めたように長く息を吐き、フォークを置いて姿勢を正す。その目は真剣にハルに向けられていた
フィアは前置きをして、話し始め、自分の望みをハルに告げる
すなわち、呪いを解きたいと・・・

この世界では魔法や気といったものはなく、超能力や超科学、人間やめてるだろとか言うような人物がいたりはしない（いや、僕が知らないだけで探せば案外いるかもしれないが・・・）
ただし、呪いは実在する
人が人を呪うのではない。人が道具を呪うのだ
呪われ続けることで、その道具は変質する
周囲や持ち主にまで悪影響を及ぼし、力を得る。呪いが、あるいは願いが具現化する

それは諸刃の剣だ。そうなった道具を使えばほとんどの場合、相手に更なる効果を発揮するが、使用者は蝕まれる
道具に
呪いに
そして、ヒトに呪われ続ければ、道具はヒトの性質を得る
魂を宿し、思考するようになり、人の姿に化けることも可能となる

「そうだ。始まりは人の呪い。私というモノは人を害し、憎悪に怨嗟に殺意、あらゆる負の感情を受け続けることで・・・呪われた。〈所有者を狂わせる〉という忌まわしい呪いだ」

フィアは呪いを、己を嫌っているようだ
ハルは何か疑問に思っているようだが、黙って話を聞いていた
僕は結構ありがちな呪いだなと思った。某ゲームの皆殺しにする剣とかを連想させる呪いだ
独白は続く

「そうなってもまだ終わらない。ヒトのｃｕｒｓｅ！カース！呪い（カース）！それは私にヒトの性質すら塗擦し、そして、ただの道具だったはずの私は意志を持った」

否、持たされたのだ
意志を持たない呪具を無知で幸せだと言い、フィアは自分がここに来た目的――呪いを解くが本当にできるのかをハルに聞く。所有者がお前なら、誤魔化すと危険だぞ、と言って
それに対するハルの答えは簡潔で、

「うん、できるぞ」
「・・・ほあ？」
「（あ、かわいい・・・）」

そこからは空気が弛緩した
ハルがフィアに「自分は呪いを受けない」「この土地は清浄な力の中心で、負の性質は減っていく」「正の思念を受ければ中和される」など説明する
僕はシリアスなのが終わったと、食事の続きに戻る。秋刀魚が美味い

ハルとフィアが話し終えると、食事が再開される
フィアがズタズタの秋刀魚を食べていると僕に気づき、話しかけてきた

「赤いのも呪いを解くためにいるのか？」
「名前で呼んでくれるとありがたいんだけど・・・。僕も崩夏さんに誘われて送られてきた口だけど、正直目的は特にないんだ。」
「なら何ぜここに来たのだ？」
「面白そうだから、というのもあるけど、日本には来たかったからね。ちょうどよかったのさ。向こうにいても誰も飾ってすらくれなかったしね」
「呪われたものを飾る馬鹿はおるまい」
「いや、呪いうんぬんじゃなくて、見た目がね・・・見る？」
「ちょっと待て、あれは食事時に見るモノじゃないだろ！」
「ぬ、気になる。見せろー！」
「あはははは。じゃあハルには悪いけど、新入りさんにお披露目しよう！あ、気をしっかり持ってね？」
「は？」

そう言って僕は立ち上がり、フィアの期待に応える
ハルは諦めて嘆息し、フィアが期待と疑問の視線を僕に向ける

「僕は盾。戦場で敵の攻撃を集中させ、あらゆるものから持ち主を

守り、味方への被害を防ぎ続けたために呪われ、伝説として語り継がれた防具！その姿は・・・」

変身、いや元の姿に戻る

大きい、それは人の全長を覆い隠さんとする大きな盾であった。禍々しく、ハートのような形をし、上に二本、側面に四本ずつ棘がある。大きな見開かれた目が特徴の、それは仮面と言っていい造形の盾だった。

「これが、自称ムジュラの盾だー！」

僕はこの日、初めて「にょわー！」と驚かれた。

てきにのろわれてしまった！（後書き）

ありがとうございました。
下記に今のところ考えている設定を書いてみました。

・盾為（たてなし）　守人（もりと）

盾：ムジュラの仮面のような禍々しい大きな盾。かなりの筋力が必要とされるだろう。体を覆い尽くしそうなほど大きい。
見た目は敵の攻撃を自分に集中させるために派手に作られた。味方を守るため、自分に攻撃を集中させたいという騎士の願いに答えた職人が、悪ふざけ以外の何物でもないと思われる見た目に反する最高品質の盾を造った。盾にはいくつか暗器や剣といった武器を収める機能までついたそうだ。

その盾は数々の戦場で使われ続けた上に、戦場に出るたび補修されていたので傷一つないまま戦場に現れた。剣を槍を斧を矢を、時には破城鎚や銃弾といったあらゆる攻撃、強風や落雷（嘘か本当かわからない）といった現象さえも防ぎ、怨嗟さえも自分が受け止めて持ち主を守り続け、味方に敵に反撃させる切っ掛けをつくり、時には見た目に怯えさせて多くの敵に呪われ、伝説として語り継がれた。

戦闘中、自分が味方や守る対照の前にいる限り敵の攻撃は自分より後ろに届かない効果と、相手にプレッシャーを与える効果（個人差があります）、攻撃を防がれると何かしらの（小さいか大きいかは関係なく）隙ができてしまう効果がある。
隠し設定：不滅で、不朽で、不動。つまり、壊れない、朽ちない、持ち主を裏切れない。とっくの昔に狂ってる。

見た目は派手（身長は低め、赤髪で、目が吊り上っていて、体には無数の傷がうっっすら見える。見た目は東洋人（↑元の魂に引かれて）であり、悪くない筈だが、きれいに整っている分妙に怖さが増している。）だが、かなり優しい。暴力反対。子供っぽい。夜知の家に来たのは父親に見つかって話を聞いて面白そうだったから。呪いを解くのにあまり積極的ではない（勲章みたなものだと思っている）。無機物に転生するとは思わなかったが、割と楽しんで生きていた。ちょっとM（いや、かなりM）。フィアがくるまで一番最近の新入りだった。よく物置で他の呪われているモノと寝ている（自分が何なのか忘れないためであるが、春亮は人間らしい生活をして欲しい）。

召喚士は逃げられない（前書き）

これは短編で書いてみた魔法少女リリカルなのはのキャロの妹に転生したという小説を、連載にするならこんなのはどうだろうと書いた作品です。
シリーズ内の世界にいる主人公は同一存在として扱っています。
主人公は他の短編や連載のキャラを呼び出します。

そういうのがお嫌いな方はどうぞお戻りください。
読んでいただけたら幸いです。

召喚士は逃げられない

この世界の一般的な魔法は術式というプログラムにエネルギーとなる魔力をリンカーコア走らせることで発動します。魔法を素早く円滑に行うには、高い技能を要しますが、デバイスと呼ばれる機械にあらかじめ登録することで、時間と手間を短縮させられます。
このデバイスが魔法の優劣を、持ち主の魔力量や資質が使える魔法の幅となると言えばわかりやすいかもしれません。

私――シャロ・ル・ルシエは魔法のない世界から転生し、魔法のあるこの世界に転生しました。私が生まれた所は、ミッドのように幼い頃から魔法などの英才教育をされていたわけではないので、固定観念というものがありませんでした。
そのため、基本的なことだろうと考えて魔力を放出し、集め、固定し、形を変えたりして遊び半分で練習していました。（残念ながらよくある火の魔法とかはできませんでした。）
ある程度成長するころには自然の中での暮らしにも慣れ、この世界の常識も学んでいました。
次元世界やこの世界の魔法のこと、生活や村――アルザスの掟など色々ありました。不思議なことや新しいことばかりで覚えるのが大変だったりしましたが、その中で魔法についての話を聞いたとき、デバイスがないと魔法を使うのが大変だと知った時はがっかりしました。
しかし、ここで家系の血と私の特異性が噛み合って変な方向に発展したのか、レアスキルというものを得ていました。

レアスキル「召喚」
（レアスキル扱いなのは、すごい術式やデバイス有り無しに関係なく、私の秘密に起因する能力のため。しかもレアスキル認定されたのはずっと後。）

召喚士というのは少ないながらも他にもちゃんといますが、私のは変わっていました。
普通は、召喚する生物と契約したりすることで、遠く離れた場所でも呼べるようになります。
私の一つ年上のお姉ちゃん（キャロ）も召喚士の一人で、特殊技能「竜使役」を持ち、アルザスの守護竜――ヴォルテールに認められ、フリードリヒ（普段は小さい）と合わせて二騎の竜を召喚可能です。
対して、私は召喚士としての才能はあるようですが、なぜかヴォルテールにすら微妙な反応（認めてもいいけど、何か怖いみたいな。異質なものを見る感じ？）されており、契約をする相手がいませんでした。
そんなある日焦れた私が己が感性に身を任せ、空間の向こうからこちらに召喚しようとしました。
いっしょにいたお姉ちゃんが止めようとしますが、私は止まらず続けます。傍から見ればそれは術式もめちゃくちゃな成功する見込みのないようなものでした。
（いや、ある！　あの向こうに私が呼べる何かがいる！）
確信した私は魔力をさらにつぎ込み、向こうとこちらを繋げました。
そして、召喚は成功。何かが魔法陣らしきモノの輝きと共に現れました。
目を開けて見た先にあったものは、

『どこ？　ここ』『しらない　はじめて』『しごと　もどらないと』
（あれ？　君は・・・）

「な、何これ？」

お姉ちゃんがそういうのも無理はありません。
私たちの視界にあるのは自然の風景と黒いまりものようなものでした。
しかし、私にはそれが理解できました。

「黒藻の獣・・・」（あ、これ私だ。）
「「え？（キュク？）」」

色々な世界に転生していった、私という存在の一つである黒藻の獣がそこにいました。
少しの間唖然としましたが、黒藻たちとお姉ちゃんの声で我に返り、召喚を解除しました。
どうやらうまく帰ってくれたようで、ホッとしたのもつかの間に今度はお姉ちゃんが色々聞いてきましたが、何とか誤魔化し、帰ったのでした。

そして月日は流れ、とうとうお姉ちゃんが村で竜を召喚する儀式をすることになりました。
結果は制御に失敗して暴走、村に被害が及び、私も色々やっちゃいました。
ええ、呼べるかもと思っていたあれがホントに呼べるとは・・・
そのため、恐れられた私たち二人は村を出ることとなりました。
死者がでなかったのが不幸中の幸いでした。

私たちは、この第６管理世界に駐在している管理局の自然保護隊に保護してもらおうと考え、色々大変な思いをしながら保護してもらえました。
落ち着いてからは私たちも働きだし、生活できるようになろうとそ

れぞれ働いています。
お姉ちゃんはあっちこっちで持て余されていたようですが、今ではどこかの辺境の自然保護隊に落ち着き、働いているそうです。
そして、現在の私はミッドの陸士部隊で掃除をしています。

「よし、きれいになったかな。」
「お、シャロちゃんお疲れ！」
「お疲れ～、いつもご苦労さん。」
「あ、お疲れ様です。お仕事頑張って下さい。」
「「おうよ！」」

ここの人たちはノリがよく、私はちょっとしたマスコット扱いです。ほんとはちゃんとした訓練を受けて部隊に隊員として所属した方がお給料もいいんですが、戦闘するのは忌避感がありますし、正直この年で戦えと言われても無理です。（前世の価値観のためでもある。）
魔力は成長した現段階でＡＡくらいはありそうですが、恐ろしいほどに魔法使いの才能は有りませんでした。空間的な把握とかは結構得意なんですが、砲撃やらシューターやらシールドやらの戦闘のためのものやブースト系といった補助の魔法がほぼ使えません（強化はできました。能力にリソースを喰われているんだろうなぁ）。ちなみに力の強い存在を召喚できることは秘密にしていて、お姉ちゃんにもお願いしています。
そこで、現在はデバイスマスターを目指して勉強をしながら、一人

の清掃員として働いています。
今日も仕事を終えると休憩室の一席を借りて勉強中です。

「ん～。やっぱり機械系は苦手だなぁ・・・。でも、こういうのって作ってみたかったし。」
「あれ？　シャロ、また勉強？」
「ん？　あ、ギンガさん。　こんにちは、休憩ですか？」
「うん。今日の訓練も終わって、次はデスクワーク。また今度いっしょに練習する？」
「あ、お願いします。やっぱり独学っていうのは難しいですね。」
「でもよく知ってたよね？　第９７管理外世界の武術だっけ？」
「はい、そうなんですけど、やっぱりちゃんと知ってる人がいればなぁ・・・」
「まあ、頑張りましょ？　シューティングアーツには、ああいうのがあんまりないから面白いわ。」
「ぶー、こっちは面白くありません。」

そう、私は地球の武術を真似て、どうにか実戦で使えないか検討していた。

最初は、私の素敵能力で背格好が比較的近いヒトを召喚し、一緒に練習していました。
それを見かけた他の隊員さんたち（ギンガさんもいた）がそれを見かけ、私たちに「その子は誰？」と聞かれたので「召喚しました。」
「召喚されました。」と素直に答えたら、
「誘拐！？」「まさかシャロちゃんが・・・」「自首しょう、な？」

「いや待て、召喚士だったのか！？」「マジで！？」

と上から下への大騒ぎに発展。

事情を説明して（誤魔化して）、（「相手に召喚許可をもらっている。」「一般の召喚士とは違って、何が呼べるかわからない」「ちなみに、後呼べるのは黒い藻とかです。」）なんとか大きな問題にならないようにして頂けました。

ただ、現在お姉ちゃんと一緒に保護してくれているフェイト・T・ハラオウンさんが駆けつけ、

「何で教えてくれなかったの！？」

と涙目でがくがく揺さぶられました。不覚にも「（かわいい・・・ハッ！）」と、ときめいてしまいました。（あれ？　魂的には問題ないのかな？）

通りがかる局員の皆さんは微笑ましくみており、中にはフェイトさんに見惚れていたり、写真撮影に忙しい人や、その買い取り交渉をしている人までいました。

・・・また後日の話ですが、早とちりしたお姉ちゃんがポロッと秘密にしてもらっていたことをフェイトさんにもらし、フェイトさんが再び仕事場に突貫してきました。

「ぐぁあああ、私の平穏が一歩どころかかなり遠のいた気がします！　これが噂のフラグ！？」

その後、私は戦闘要員の人たちのお誘いを丁寧に断りましたが、以前よりもよく話しかけてくれるようになりました。

ギンガさんはその武術にちょっと興味があったみたいで、一緒に検

討したりもします。
そんな毎日でした。

今日もお仕事に勉強、訓練などをしていた昼下がりの休憩中、なぜか部隊長に呼ばれました。
仕事かな？　それとも異動？　まさかクビ！？　と悩んでいると、部隊長室に着き、ノックをして来訪を告げます。
すると入室許可がすぐに下り、私は中へと入ります。
挨拶をして、用件を伺うと、

「シャロの嬢ちゃん、今度新しく地上にできる機動六課に異動な。」
「え？」
「いや、な。うちで研修した八神っつーのが新しくここ、ミッドにエリートを集めて部隊を造るんだと。八神を筆頭にヴォルケンリッターやら、高町やハラオウンの嬢ちゃんたちが集まってんだよ。」
「あ～、フェイトさんあたりに呼ばれたんですかね？　何ででしょう？」
「さあな、一緒に働きたいとかじゃねぇのか？」
「そ、そんな理由でいいんですか？」

驚きです。仮にも正義の治安維持組織がそんなことで権力使っていいんでしょうか？
（大げさですが、）管理局の腐敗を感じます。

「いいも何も正式に手続きまでしてるから、諦めていくんだな。」
「そんな～・・・」
「はっはっは、まあ向こうでも達者でな？」

「わかりました。え～っと、他には何かありませんか？」
「ないな。　さ、戻って荷物をまとめるといい。そんなに余裕ないだろ？」
「うわ、ホントだ。　それじゃあ、失礼します。」

おう、と声をかけられ、私は退室し、急いで部屋に戻ります。
期限が近いため、少しあわただしくなるでしょう。
ああ、皆さんに挨拶して回らなきゃ・・・
これからのことに不安を感じながら私はせっせと異動の準備を始めたのでした。

召喚士は逃げられない（後書き）

ありがとうございました。

省略したところは、この作品を続けた場合に、番外編などで書こうかと思います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3247y/

ある男の転生物語　（ネタ）

2011年11月8日01時06分発行